



詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニュース

CONTENTS

笑顔礼讃西東

舞俳句会 (神奈川県・横浜市) 2~3

三木星音子 (千葉県・我孫子市) 4

詠み人スクランブル

《何がおいしい? 秋に食べたいもの》10~11

新潟ぶり／會津八一の唯一の門弟 12

詠み人の「リレーエッセイ」 歌人 **雪舟えま** 16

「なつかしい遊び・玩具」シリーズの4回目。竹とんぼは、科学者平賀源内が発明したものとされています。文政2(1819)年、奈良の氷室神社に奉納された石灯籠にカルタ、でんでん太鼓など、当時のおもちゃが刻まれ、その中に竹とんぼもあったことから、広く普及していたことがうかがえます。秋空にシュツ、シュルルルと舞い上がって。

温古知新 ④2

「菜根譚」14

何気ない日々の生活から幸せを呼び込むことを説いた前回まで。秋の夜長、「菜根譚」にお付き合ってください。

我、人に功あるも念うべからず。而るに過ちは則ち念わざるべからず。人、我に恩あらば忘れべからず。而るに、怨みは則ち忘れざるべからず。

(他人に施した善行は忘れ、他人にかけた迷惑は忘れてはならない。他人から受けた恩は忘れず、他人への恨みは忘れなければならない。) 恩を施す者は、内に己を見ず、外に人を見ざれば、即え斗粟も万鐘の恵みに当たるべし。物を利する者は、己の施しを計り、人の報いを賣むれば、百鎰と雖も一文の功を成し難し。(恩恵を施す際は、利害の関係なく行えば、米一升であっても価値がある行為だ。しかし、気持ちに下心があれば、例えそれが大金であっても一円の価値さえ生み出すことは難しい。) 自分には厳しく、人には優しく。損得勘定なく行動できる。この境地に達してこそ「できた人間」なのでしょう。

人の際遇は、齊なる有り、齊ならざる有り、

而してよく己れをして独り齊ならしめんや。己れの情理は、順なる有り、順ならざるあり、而してよく人をしてみな順ならしめんや。此れを以て相観し対治すれば、またこれ一の方便の法門なり。

(人の身の上をみれば、満たされている人もあればそうでない人もあって、自分だけが幸せで良いことはない。自分の思うことが実現することもあるればそうでないこともあり、人の思いだけが上手くいって良いこともない。この関係をよく考えて対応するのも一つの方便である。) 自分だけでも他人だけでも良いことはなく、「中庸」の心が重要です。

心地、乾浄にして、方めて書を読み、古を学ぶべし。然らざれば、一の善行を見ては、竊みて以て私を済む、一の善言を聞いては、仮りて以て短を覆う。これまた寇に兵を藉し、盗に糧を齎すなり。

(心が清潔であつてこそ、新しいことから古いことから学べる。そうでなければ、都合の良いことばかり考えて利己心を満足させるだけである。このようなことでは、敵に武器を与え、泥棒にご馳走するようになるのだ。)

心清らかに、正しい行いをしていく前提がなければ、何事も成功しないのかもしれない。

自己を律し、他人への思いやりを忘れない。また、バランスよく考える事も必要と言つ事でしょうか。次回は56項より! (古川久美子)

舞俳句会

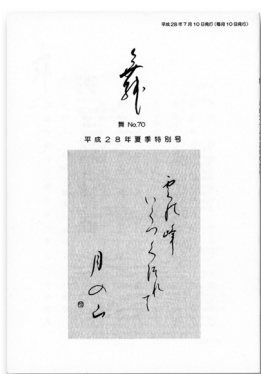
主宰 山西雅子様

(神奈川県・横浜市)

8月6日(土)、かながわ労働プラザにおいて「舞俳句会」の本部句会・勉強会が開催されました。本日は会員外で26歳の黒岩徳将さんも飛び入り参加され、28人という大人気で4時間という長丁場、最初は勉強会からスタートです。



▲主宰 山西雅子さん
2010年「舞」を創刊



▲月刊「舞」最新刊は72号

こちらの勉強会、現在は「芭蕉研究」というテーマで毎回各担当が芭蕉の足跡を調べ発表するもので、本日は全10回の2回目。初回から3回目までを担当される秋津寺彦さんは、芭蕉29(37歳の「江戸市中居住期」について約1

時間には生と死の区別があり、和男風には生死の区別があるとした着眼点がおもしろい。「風に生死の区別あり」を「風に生と死」くらいに減らして、もう少し季語の青芒のことを言えば、具体物に重心が移り、その中に抽象が入つてもっといい句になる。

青芒風に生死の区別あり 和男
山西：「風死す」という季語もあり、風には生死の区別があるとした着眼点がおもしろい。「風に生死の区別あり」を「風に生と死」くらいに減らして、もう少し季語の青芒のことを言えば、具体物に重心が移り、その中に抽象が入つてもっといい句になる。

水滴に狼狽へてまた蟻となり さおり
・水滴に入った蟻が、ちよつと蟻じゃなくなつて、でもまた蟻になつて出ていく。時間の経過を瞬間的に表そうという新しい表現に思えた。

その後、句会にうつり本日は55句のなかから2句選、うち1句を特選に選びます。各人が選んだ特選について感想を述べ、作者の弁があり、山西先生より講評をいただきます。



▲20ページものレジメを準備された秋津寺彦さん

管吹き息まつすぐに凌霄花 なほ固
山西：保留にした句。凌霄花は少し広がっている、アルトホルンに近い感じ。笛と凌霄花のイメージが私には重ならなかった。

脚見せて幕引く黒子夏芝居 ちえ子
・脚を見せる黒子、田舎芝居といった滑稽さが伝わってくる。

●主宰特選
・橋本多佳子の作品に「薔薇色の雲の峰より郵便夫」という句があるが、いづれの句も幸福感が色の比喩で表現されている。

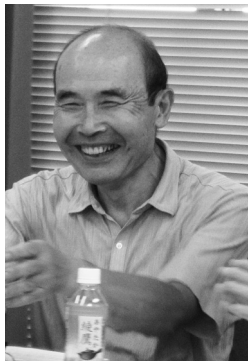
作者：これはイースター島のこと(笑)。
山西：見せての「て」が気になった。「見せ」も「夕立くる」も動詞。「はつきり見せて」の7音を「はつきりと」「見せ」と、5音と2音に分けて重たさを出した方がいい。

実の方に引っぱることができるといふ。あめんぼう水面の雲を横切り 澄子
山西：あめんぼうは事実、水面に映った雲はあなたの天のもので映像。不思議な空間が描かれた完成度の高い句。ただ、こういう世界は結構詠まれていたので、よほど工夫をしないと成功するのは難しい。

波型のトタンを透ける大暑かな 良一
山西：読む人によって、探るか採らなかがわかる句。最も暑い大暑が波型のトタンを透ける、とひとひねりしてあるが、その仕掛けに乗れなかった。

雨あがりてで虫葉上一文字 ツネ
山西：姿が一文字なのか、這つていった跡が一文字なのか、もう少し読む人にわかるようにできるといい。「雨あがりてで虫は身を「一文字」にすると、葉は消えるがだいたいのはわかる。ユニークで素敵な句。

片蔭を少しもらひて犬歩く 芳香
山西：主人と犬との位置がよく描けた描写力のある句。



▲本日の名司会者 吉澤美穂さん

いかも。内容は異なるが「ながながと避暑の車の下に猫」として、避暑に出かけた車の下の猫を詠むこともできる。ポケモンGO 探す男の蟻地獄 秀彦
山西：蟻地獄がこの句の中でどれだけの実態があるのか。季語が比喩になっているのが少し気になる。
さざ波のごとくに八重の木槿かな みの
山西：一片の花びらがさざ波のようというならわかる気がするが、全体をさざ波のごとくに、という点がピンとこなかった。
◎主宰特選
解体ビルに鉄筋のひげ夏の雲 惠
ぐにやりと曲がった鉄筋をひげに例え、壊されていく哀れを感じた。
山西：採らなかった方は「解体ビル」という言葉はどうなんだろうと思っただかもしれない。上五が重くなっているがこの句の内容からすればあまり気にならない。はつきりと映像が浮かぶ。
―その後、特選には採られなかったが、選に入った句、入らなかった句、一点、一点すべての句に当たる。
墓友と写経に通ふ蟬しぐれ 弘行
山西：同じところに墓を買って生前から交際する「墓友」という言葉は、最近よく聞くようになった。俳句に新しい風俗を取り入れることは悪いことではなく、現代の一つの姿を現しているの

で、どんどん作っていいと思う。ただ、この場合まだ「墓友」の認知度は高くないので、題材を墓友に絞り「墓友といふ友のあり蟬しぐれ」ともできる。
まばたきの間に消えし夏の亀 宏子
山西：よくわかるが、夏の亀が気になった。春夏秋冬はいろいろなものについて季語が作りやすそうに見えるが、活かすのは案外難しい。何にでもつくわけではない。「まばたきの間に亀消えし」として、下五はしっかりした夏の季語をもってきた方がいい。
夏の夜や枕の鼓動聞きてをり 正一
山西：「枕の鼓動」はおもしろい。せつかくここまでいったのなら「聞きてをり」は止めて、夏の夜の枕の鼓動がどうであるかを詠み進めるといい。きつと春の夜や凍つる夜とは違う、夏の夜ならではの感じがあると思うので、ここがおもしろい句になる攻めどころ。
かの夏のうたた寝さめてラジオかな 三郎
山西：玉音放送のこと？ それであればさめてだと軽い、さめしに。
降りしきる雨のかたちや冷やつこ 道石
山西：「かたち」という言葉は抽象的になるから難しい。よく使われるがあまり使わない方がいいと思うのは「風のかたち」という言葉。わんさか出てくる。
小さき尾の立つは雷や葛の蔓 雅子
山西：これは私の句。地味に写生をして作るのが好き。葛の蔓を見て、雷の尾つぽのようなものを表現したくていまだけ取りつかれている。今も「小さき尾」よりも「短き尾」の方がいいかと思っていた。
生ふる草その勢ひや夏旺ん ちひろ
山西：最初に生ふる草というものを示

し、畳みかけるように言葉を繋ぐ勢いが良い。
受注なる薄氷の思ひ汗ポトリ さおり
山西：薄氷の思ひは、薄氷を踏む思ひだと思ふ。ポトリはひらがながいい。仕事の句は素材としてもあまりないのだから、とどろいんな場面を詠んでみてほしい。
後シテと灯蛾の乱舞夜の能 文字
山西：ここのある情景だが、「夜の能」を削りたい。「灯蛾」は夜が前提なので。軸足は微動だにせず青田風 寺彦
・孤高の白鷺の姿を想像した／私は青鷺(笑)／稲のことだと思った。茎の下の方に着目したところがいい。
山西：稲の根元はわかるが、足っているのが…。
作者：そうなんです。それを茎元と言つては陳腐だし、冒険して軸足と言えば先生が飛びついてくれるかな、



▲終始和やかで気持ちのいい会でした

と思ったのですか駄目でしたか(笑)。
夏草や遺跡跡跡めし二千年 雅龍
山西：遺跡を遺構にすると物質感がでる。
排泄も食事もきらひ水遊び 徳将
山西：私だったら「おしっこもお昼もきらひ水遊び」にするかな。若い方だから言葉の好き好きはあるし、語感の問題だと思ふが。
作者：排泄にするかおしっこにするかは悩んだ(笑)。
突堤で鰹釣る昼や雲の峰 とんぼ
山西：季重なりの句。焦点が絞りがいいので季語は1つが望ましいが、まずは絶対2つ必要なのかを考えてみる。「雲の峰」は雲を峰に見立てているので、「雲そそり立つ」と開いて、全体を組み替えた方がいい場合がある。
★主宰の山西さんの声は明るく澄み、歌うように軽やかに響くその声がりー下するのか、開始早々、会の雰囲気はワントーン上がる。大人数にもかかわらず、一人一人が偏ることなく発言し、一つ一つの句を決して無駄にせず掘い上げ、必ず活かそうとする。そのこだわりと、粘りは執念を感じるほど。つまりそれは、一人一人、一つ一つの俳句を存分に尊重しようとする証。俳句の根本を相互に学びあい、実作ではすべての句に光を当てようと頭をフル回転させ、でもそのヒントを決して押しつけず差し出すようにくださる。皆さんが私にも大変にご配慮くださり、思いやりにあふれた「舞」俳句会でした。
(木戸敦子)

三木星音子様

(千葉県・我孫子市)

句集『白鳥』百鳥叢書90篇

8月5日(金)、本年2月に句集『白鳥』を上梓された三木星音子さんにお話を聞きしました。

◎お歳をお聞きして驚きました

今年の2月で90歳になった。去年白内障の手術をしたが、今のところ杖のお世話になることもなく出歩いている。もっぱら女房の詩吟や書道の送り迎えだけど、近くなら車の運転もしている。私は俳句専門。今は月に9つの句会に出ているから、平均すると週に2回。明日は千葉句会で明後日は吟行会。この暑いのにね(笑)。

◎大丈夫なのですか？

平気だよ。今は俳句が仕事だと思っているから。健康の秘訣？運動も散歩も何もしない。おまけに、句集にも「終戦日胡瓜嫌いを通しけり」という句があるが、昔から野菜嫌いで一切食べ



▲とても90歳とは思えないご活躍ぶり

ず、今は青汁だけ(笑)。まあ好きなように生きてきたから長生きなのでしょ。月曜日は極力休肝日にするようにしているが、今でも毎日飲むよ。とってもビール1缶だけどね、それも第3のビール(笑)。

◎俳句専門とのことですが

家にいるときは朝食後は新聞を読んでも、あとはお昼まで机に向かっている。もちろん俳句もつくるが、他の人の句を書き取りしていることが多い。今は俳句手帖の秋の部を書いているが気に入らない句は書かない(笑)。文字を書いていると頭が活性化するのは、書くことで気づくことがあるし、知らないことは辞書で調べる。へえ〜こんな作り方があるのか！と新しい発見をしたりね。俳句以外は、時代小説とテレビを見るくらい。でもドラマは大嫌い。これ以上、人生で泣いたり笑ったりはほしくないよ。小説は読みだしたら止まらないから、12時で止めて寝ることにしている。夜は夜で忙しい(笑)。

◎俳句との出会いは？

生まれは京都の福知山。中学の先生が劇作家の岸田國士(くし)の甥で、文学青年だった。その影響で俳句に出会い、18歳で塚原夜潮主宰の『渦潮』に初投句、翌年、岡崎水都の句会に参加し、同年19歳で俳句同人誌『星』を発行し代表となった。その間、17歳から海軍の役所に勤め始め、土地の買い付け等をしてきたが、ある日「来月から軍人になれ」と言われ、普通の勤務から軍人になった。そういう時代。その反動か



▲折々を遊ぶ手賀沼の友白鳥をタイトルに

らか、何かに憑かれたように俳句に熱中し、月に一度は大阪に上京し句会に出ている。当時住んでいた呉と大阪間は片道約10時間もかかったのに。

ところが、24歳の時に『星』を終刊した。もう記憶にないが、生意気だとかなんとか、よほど腹に据えかねることを言われたんだろうね。それから50年は俳句を中断し、仕事人間として生きてきた。

◎50年のブランクですか

今にすれば悔やまれるが、仕事を辞めたら始めようとは思っていたので、平成12年、72歳の時に再開した。若くして始めた俳句だが、花や鳥の名前ほとんど知らず基礎がない。角川の通信講座で一から先生の指導を受けることにした。退職後は、故郷の福知山に戻ったが、女房が倒れ、心配した子どもたちが近くに住んだ方がいいということで、それまで一度も来たことのない縁もゆかりもないこの土地に住み着き、今年で17年になる。

◎この土地でこれからも俳句中心の生活ですね

そうだね。句会はそれぞれに性質が違ってもおもしろい。だから行っている。

といつても過言ではない。明後日は吟行だが、吟行はいつも成績が悪い。その景にとらわれて、思考やイメージが飛躍しないから。でも頭はフル回転させなきゃいけないし、それが刺激になり勉強になる。最終目標なんて大層なものはないが「百鳥」の師である大串先生に採ってもらおう句を1句から2句にしたいとか、そんなこと。先生の句は不思議なんだよね。特殊なことは何も言っていないのになんとなく惹かれる、そんな句が作れたらいい。

「白鳥」より5句

星空を流れきし水滴となる
保育器に育つ命やさくらんぼ
団子屋の列に加はるバナマ帽
暑気払ひ高高と詩を吟じけり
白鳥を流離の友と思ひけり

★句集には「石窯ピザ」や「ジーパン」「路上ライブ」といった単語も楽し気に踊り、三木さんの古びない精神性を感じる。幼くして、父のいない、お母様との生活は決して楽なものではなかったと思うが、ご苦労を微塵も感じさせずに淡々と飄々と生きていらつしやる。曾孫4人の名前も「ややこしい名前なんだよ」と言いながらスラスラと口をつき、昔交流のあった俳人の名前もぽんぽんと出てくる。命は食べ物という物質だけで育まれるのではなく、情熱という目には見えないものが支えていることを三木さんとお会いして改めて感じた。(木戸敦子)



投稿作品

※ 誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。
 ※ 今回の投稿作品数は、257でした。
 ※ しめきり2016年11月16日(水)まで
 ※ 作品は原稿どおりに掲載しております。

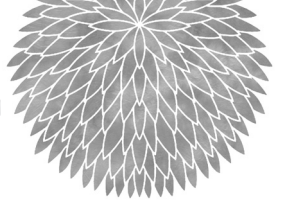
川柳

- 1 ありふれた言葉で味なことを言う
丸山芳夫(東京都)
- 2 飲む理由毎日すらすら浮びくる
橋本世紀男(東京都)
- 3 生き方が花火模様と皮肉られ
関本 守(新潟県)
- 4 裏も見せ表を見せて金を獲得
リオ体操男子団体
西條公雄(埼玉県)
- 5 原発の避難の地区よ虫の声
原 崇雄(埼玉県)
- 6 加齢です老化と言わず気をつかい
石原 岳(群馬県)
- 7 『お盆玉』いつからあるのこの言葉
阿部澄江(宮城県)
- 8 土壇場は真価問われる分れ道
細川光子(栃木県)
- 9 馴初めも別離も歌になる演歌
長谷川庄二郎(千葉県)
- 10 核のゴミ捨て場が多くて決られぬ
岩崎弘舟(岡山県)
- 11 乳のみ児にふれよみがえるふくみ乳
奥那於子(大阪府)
- 12 恩を仇ダツカのテロは許せない
守屋高雄(岩手県)

- 13 35度よう生きとるわと一人ごと
佐伯セツ子(香川県)
- 14 流れ星タイムングよくキスされる
小山恵美子(大阪府)
- 15 人生の双六を見る昼の月
木村洋一(新潟県)
- 16 離農して古里恋するもの地
久保寿雄(北海道)
- 17 断りの訳に持病が役にたつ
山口千鶴子(東京都)
- 18 犬猫もお悔やみ欄に載る予感
目黒豊光(福島県)
- 19 語らねば忘れが多くなる夫婦
鈴木義雄(福島県)
- 20 オレオレと言わなくなった子の電話
大久保アヤ子(東京都)
- 21 いまの内何が出来るか考える
松田義登(福岡県)
- 22 眼鏡かけメガネを探す老いた父
藤沢健二(千葉県)
- 23 横断中点減怖く一度待つ
木村誠一(神奈川県)
- 24 レジエントと呼ばれてからの負けの数
高柳閑雲(愛知県)
- 25 かねでなく溜る一方体脂肪
山崎一嘉(愛媛県)
- 26 枝豆もグローバル化して外国産
和崎治人(山口県)
- 27 炎暑日のホット便座で採めている
川瀬幸子(千葉県)
- 28 川柳欄我が句無くても味読する
西山知子(岡山県)
- 29 ジャンケンに孫と夜のコミニケーション
林 玉子(長野県)

俳句

- 30 一歩でも先へと急ぐ春日傘
浅海和代(東京都)
- 31 鬼瓦有明月の冴えてをり
松田重信(埼玉県)
- 32 屈託を洗ひ流して夕立かな
鈴木清子(埼玉県)
- 33 隠れてはつと顔を出す蜥蜴の子
磯部 力(新潟県)
- 34 吾が身にも秋は来にけり遺書書かむ
井原毬子(東京都)
- 35 貴婦人の艶見ることし紅芙蓉
中島光江(埼玉県)
- 36 歳を積みつる懐郷秋の虹
大谷 茂(埼玉県)
- 37 空蟬や己の骨は拾へない
川口 襄(埼玉県)
- 38 新盆の念仏踊り夜を徹す
林 克(福島県)
- 39 滴りて滴りて岩穿ちたる
佐々木崇嗣(新潟県)
- 40 忘れたい記憶の戻る端居かな
井上静夫(栃木県)
- 41 探偵のごとく片蔭出てざりき
松嶋光秋(東京都)
- 42 茄子の馬夫をのせるは無理なこと
堅田秀子(東京都)
- 43 一人居て我をなくさむ風鈴よ
水落重式(新潟県)
- 44 茹でたての走りそら豆白ワイン
古谷 力(東京都)
- 45 靖国の妻百一歳終戦日
大橋恒次(新潟県)
- 46 子子のピコピコと大バケツ
二瓶邦枝(埼玉県)
- 47 故郷の沼の黄昏行行子
大阿久雅子(埼玉県)
- 48 プレゼント開いてみれば天の川
白戸麻奈(東京都)
- 49 遠火花記憶のそのの戦の火
川嶋法子(東京都)
- 50 新涼や孤愁をとばし闊歩する
黒岩正子(埼玉県)
- 51 せせらぎに紫散らす杜若
片山茂子(埼玉県)
- 52 白障子写経の墨の香りかな
阿部徳夫(宮城県)
- 53 ハンサムな兄の遺影や終戦日
高崎登喜子(東京都)
- 54 富士晴るる出揃ひたるや稲穂かな
清まさじ(静岡県)
- 55 どんぐりに遠き記憶を拾ひけり
内河邦久(東京都)
- 56 八十歳力尽くせりつくつくし
有坂馨園(福島県)
- 57 八月やインシュタインの戦争論
阿部 至(埼玉県)
- 58 雷鳥の声なす四方は霧浄土
上村元義(神奈川県)
- 59 再読のわだつみの声蟬しぐれ
三津木俊幸(千葉県)
- 60 終戦忌記憶の地図を彷徨す
長峰正晴(千葉県)
- 61 残暑激しければ家居の里長し
津田吾燈人(高知県)
- 62 めらめらと燃ゆる片恋夏炬揺く
椋本望生(大阪府)
- 63 シャレ気なき若き母子のスターマイン
安部 哲(新潟県)
- 64 写し絵の佛の妻に秋の声
津田忠彦(岡山県)
- 65 余生にもときめきありて夕涼み
野木宗信(奈良県)
- 66 はらからの末も七十路銀河濃し
寺内 侖(埼玉県)
- 67 天皇のお気持は「反戦」長崎忌
梶 鴻風(北海道)
- 68 同じ輝きだよ、銅の涙
白松いちろう(千葉県)



- 69 唾蟬のぱたりと落ちてそれっきり
吉村充治(埼玉県)
- 70 君といた日々をしのびつ秋彼岸
堀田寿美子(北海道)
- 71 祈る事多くなりたる今朝の秋
小澤円梨(静岡県)
- 72 四姉妹ゆかたを着せて我も寿
松尾らん(東京都)
- 73 夏休み上牧もまた家族連れ
宇都木安子(東京都)
- 74 食卓に難民のごと蟻九匹
岩村 昇(神奈川県)
- 75 二の腕を踊らせて打つ今年蕎麦
小林七重(新潟県)
- 76 盆まいり幼き頃の夕日さす
杉村美保子(岩手県)
- 77 リオ五輪明日の日本が見えてくる
萬濃その子(神奈川県)
- 78 父遠し母なほ遠し天の川
佐野和彦(静岡県)
- 79 終戦日重ねかさねて老いにけり
渡邊 清(宮城県)
- 80 古代蓮友と愛で行く小さき幸
道給一恵(埼玉県)
- 81 短命を知つてる如き蟬時雨
鏡たか子(山形県)
- 82 茄子奏える洋上はるか颯風の眼
藤井春三(埼玉県)
- 83 多羅葉に願ひ書きこみ天の川
菅原茂子(宮城県)
- 84 炎天や鉄のほひの鉄の街
小島岳青(新潟県)
- 85 髭剃りて月下美人に逢ひにゆく
近藤薫也(千葉県)
- 86 箱根山大地揺さ振る蟬時雨
塩崎須美子(神奈川県)
- 87 岩盤の藻口先這わせ夏の鴨
星 一子(神奈川県)
- 88 茶つみ唄エンジン音になりかわり
田野倉訓郎(東京都)
- 89 垣根越し渡す朝取り胡瓜かな
中嶋清子(佐賀県)
- 90 この峡に生まれ住みつゝ大根引く
佐藤儀雄(北海道)
- 91 震災忌全村避難堪へがたし
福岡 悟(東京都)
- 92 多情多恨包み込んだる夏座敷
早乙女文子(埼玉県)
- 93 無人駅出でて土手沿彼岸花
田中 昶(鳥取県)
- 94 炎昼の火伏せの神の堂に座す
湯浅芳郎(岡山県)
- 95 でこぼこに走る焰や芝を焼く
宮宅芳子(岡山県)
- 96 しがらみ断つ真剣勝負汗の玉
居原田連星(大阪府)
- 97 夏祭り見知らぬ子等も綱の友
大塚徳子(埼玉県)
- 98 動かざる山の頂き星月夜
天野輝子(東京都)
- 99 漬けて煮て焼いて炒めて今日も茄子
吉里ひとみ(東京都)
- 100 母の日に触れぬ会話や父子家庭
山崎吉晴(群馬県)
- 101 風に触れ陽に憚らず秋桜
井上氣海(広島県)
- 102 盛大に蓮の花咲く人出かな
重原 昇(新潟県)
- 103 炎天のこの一球のしじまかな
城山憲三(愛知県)
- 104 富士川の岸辺火の舞ふ投げ松明
杉原明子(静岡県)
- 105 夏の陣小池百合子の大勝利
濱田イサオ(福岡県)
- 106 雨をぬぐ藍富士背なに孟蘭盆会
神 一男(静岡県)
- 107 秋蝶の窓辺にきては風と去り
中田文子(大阪府)
- 108 納豆を掻くほど糸引く緑雨中
岩田 信(神奈川県)
- 109 戦争を知らずにあれかし夏球児
大場草月(長野県)
- 110 朝の空友の思ひ出白木樫
竹本芙美子(新潟県)
- 111 百日紅陛下お気持ち表明す
井田由利子(宮城県)
- 112 迎火を小さく焚きて母を待つ
村田吉雄(東京都)
- 113 投票所青柿もはや十八歳
中山日出子(大阪府)
- 114 戦争はいやとままとのしりぬぐい
大窪美代子(大阪府)
- 115 行く先の分からぬ宿の蝸牛
浦橋渴雪(兵庫県)
- 116 ひぐらしや後片付けの測量士
一瀬正子(埼玉県)
- 117 帰り来ぬ風とは知らず百合撩乱
池田 岬(千葉県)
- 118 生かされて今日も留守番卒寿爺
齋藤心仙(千葉県)
- 119 古庭や端居の妻のえびす顔
古川正栄(千葉県)
- 120 糸手繰り釣師の換ふる罔鮎
津布久信雄(東京都)
- 121 もろこしを挽いで苞にと郷の友
駒場京子(神奈川県)
- 122 冷素麺一把で足りて老ふたり
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 123 女郎花時計のカチコチ夜長かな
湯浅暉子(石川県)
- 124 風神の袋は空か油照
無記名
- 125 雨戸繰り二度見上げおり星月夜
小泉和明(茨城県)
- 126 星月夜じつと仰ぎ見刻忘れ
金子範子(高知県)
- 127 孟蘭盆会味噌を買いくる老婦あり
小林春雪(新潟県)
- 128 空見上げ白くかがやく天の川
田中恵美子(山形県)
- 129 台風一過真白き道に和みけり
田野井一夫(栃木県)
- 130 九百の元首集へり原爆忌
檜山とり子(東京都)
- 131 散り敷いて槐の花の夕明り
服部八重子(東京都)
- 132 虹の根へ追ひかけてゆく媪かな
鷺谷浅子(茨城県)
- 133 子子子母回し飲みする極暑かな
中村康浩(福岡県)
- 134 大夕立まろび駆けゆくランドセル
浅野信廣(宮城県)
- 135 天空の母に届くや若葉風
本間ミネ(新潟県)
- 136 手花火に輝くひとみ三才児
本間 進(新潟県)
- 137 書が動く金沢翔子夏の展
富樫和子(山形県)
- 138 今生に思はぬ長居星祭
増本和子(大阪府)
- 139 菜園の収穫減りて秋に入る
松前邦広(千葉県)
- 140 緑蔭に老の語り笑顔見る
木村 舩(山形県)
- 141 とりあへず生きてみまようよ雲の峰
鈴木岑夫(千葉県)
- 142 良人のをどり浴衣が解けさう
本庄準也(埼玉県)
- 143 新潟より茶豆の届く良き日かな
金子よし子(新潟県)
- 144 初秋の響きとなりて波寄する
邑橋節夫(兵庫県)

- 145 尺程の純白ダリアふと寂し
菅原キイ子(宮城県)
- 146 満月に桔梗の花と絵筆もつ
長谷部喜代子(大阪府)
- 147 しかられて稽古帰りの星月夜
有田俊一(埼玉県)
- 148 亡き母に笑顔運んだカンナ咲く
針生 清(千葉県)
- 149 敗戦忌平和条約無に等し
菅井文男(新潟県)
- 150 風死んで昨日のことを忘れけり
鈴木蝶次(宮城県)
- 151 台風の狂暴なるや弱き民
齊藤安弘(神奈川県)
- 152 秋天や気まま暮しを過ぎる雲
高垣勝代(大阪府)
- 153 山並の平伏したる望の月
今井勝子(新潟県)
- 154 おさな子に秋桜ゆれて通りやんせ
中川義彦(新潟県)
- 155 秋声を聴く谷川岳の懺悔岩
石井一枝(埼玉県)
- 156 一日終へ庭に色濃き千草かな
増田公代(東京都)
- 157 海を越え音無しの遠花火
中村和弘(愛知県)
- 158 渋抜きを知恵もて柿を穫り尽す
大矢知順子(神奈川県)
- 159 眠れぬ夜故郷恋し盆の月
柴田恵美子(北海道)
- 160 時化去りて夕闇奏でる虫時雨
沖 惇子(大阪府)
- 161 一昼夜BGM化して虫の声
石川郁子(埼玉県)



短歌

- 162 平和とはかくも難きか飢ゑに臥す子
らは鼻孔の蠅も追へない
黒澤正行(福島県)
- 163 今はなき人々の顔まざくと想い出しつ、雨音を聞く
北澤実夫(東京都)
- 164 夕食時ふと気付けば足をもて卵が踏まれ潰されてをり
今井忠一(埼玉県)
- 165 訪えばどなたですかと歩み寄る老女に友の名を呼びかける
寒川靖子(香川県)
- 166 二十年続いた出前短歌会背骨折止めて五年
高須 孝(愛知県)
- 167 四年間想いぶつける泣き笑い夜昼忘れ皆応援し
大橋絵代(千葉県)
- 168 父の身を案じ帰省の子は太り夏野菜カレー平らげた夕
濱崎祥子(鹿児島県)
- 169 新盆を迎えし朋の生涯を密かに語る友の心情
田中恵恵(新潟県)
- 170 榎林を巡りきて友と語り酌む雨となる夜は心地よく酔う
桑原謙一(群馬県)
- 171 秩父事件の学習すみて家苞に「草の乱」とふ地酒を買ひぬ
山田良男(埼玉県)
- 172 初めての選挙に迷う孫の見るパソコン・スマホの情報多し
関原幸子(東京都)
- 173 朝ごとに咲き盛りつつ彩りて窓の清しき朝顔の花
青木日出男(群馬県)
- 174 台風過ぎ風鈴の音もさみしげにそぞろと秋の気配をつたふ
坂元正憲(東京都)

- 175 乳房よの短歌賞にときめいた十余年前脱獄の朝
早坂絃司(北海道)
- 176 征きし父と歩みし草みち舗装され北に並びてリニア通る
土屋喜雄(山梨県)
- 177 地位はなき父母からもらいしこの身体元氣健康で強く生きんと
渡部美代子(山形県)
- 178 卒寿すぎ此のながき生命戴きて気付かせ給ふことの多くてありぬ
中田妙子(東京都)
- 179 地震あり今日もニュースで知らせ聞く多くの人の涙を誘ふ
高橋登志子(新潟県)
- 180 旅の宿大正ロマンたゞよわす銀山温泉姉と湯にひたる
大鳥居牧子(東京都)
- 181 日にちを楽しく過せの法話にも共感ありて健やかに生く
峯岸信子(東京都)
- 182 大漁を魚の悲哀とみすゞ詠む我は美味しと秋刀魚を食らふ
久本にい地(岡山県)
- 183 面ざしに昔のありぬ踊笠幼の記憶ふるさとの盆
村山徳英(埼玉県)
- 184 筑波嶺に落ちゆく夕陽蹴りあげて空爆止めてと叫んでみる
合田浩子(茨城県)
- 185 白梅の天に伸びたる励ますや香りただよう気品清らか
五味田幸夫(神奈川県)
- 186 限られた命を生きた蜩の静かなる眼に新涼の露
小川 暘(大阪府)
- 187 近き海散歩コースの幼子は初の言葉の舟を指さす
山口嘉子(三重県)
- 188 プチトマト二つ三つ四つかみしめてせみ追ひかけし夏空想ふ
若月理依子(新潟県)

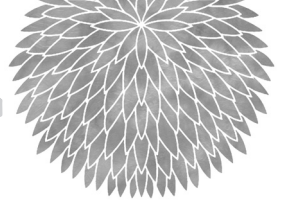
フォトイック

- 189 うすれゆく記憶の夫と撮る写真背に秋海棠つくり笑いで
岩崎令子(大阪府)
- 190 雨上がり太陽が昇り大空に美しい虹が二重にかかる
新井 賢(埼玉県)
- 191 一声を残して蟬の落ち来る木もれ日浮き立つ午後の境内
島田實貴男(群馬県)



こちらの写真を見て
詠んでいただきました。
(写真提供：伊丹三樹彦さん)

- 192 歳月が消してしまつた風の彩
松田重信(埼玉県)
- 193 べちゃやくちやと落葉のおしゃべり果しなき
井原穂子(東京都)
- 194 来し方を語り合つてる落葉かな
橋本世紀男(東京都)



- 195 まだ掃くな静かにしてゐる落葉たち
水落重式(新潟県)
- 196 隙なくし伏せぬる葉なみ野分去く
千代田栄次(東京都)
- 197 少し好き同士約束すつぽかし
二瓶邦枝(埼玉県)
- 198 散りつくし天の明るき大銀杏
大阿久雅子(埼玉県)
- 199 古木から初秋の匂してをりぬ
黒石正子(埼玉県)
- 200 大銀杏散る外つ国にあこがるる
片山茂子(埼玉県)
- 201 小さな象前片足で立つて見せ
石原 岳(群馬県)
- 202 どうしようこれからみんなどこいこう
阿部徳夫(宮城県)
- 203 「みんな無事」本当にこわい秋の風
阿部澄江(宮城県)
- 204 ビートルズ流るる茶房黄落期
高崎登喜子(東京都)
- 205 一人静かに夢を見る事が好き
清まさじ(静岡県)
- 206 北欧の一足早き冬仕度
三津木俊幸(千葉県)
- 207 夜遊びの過ぎたるカント色葉散る
椋本望生(大阪府)
- 208 目鼻出し落葉と遊ぶかくれんぼ
長谷川庄二郎(千葉県)
- 209 手探りは象の足とぞ秋思かな
津田忠彦(岡山県)
- 210 落葉はく落葉はいて一日が終る
岩崎弘府(岡山県)
- 211 新芽よし万緑もよし散るもよし
奥那於子(大阪府)
- 212 窓は目に木は鼻となり散り銀杏
梶 鴻風(北海道)
- 213 ホスピスの窓辺息づく黄落期
北野耕兵(千葉県)
- 214 人去りしあとの落葉に灯の点る
小澤円梨(静岡県)
- 215 地に描く落葉ナチユラルアーティスト
宇都木安子(東京都)
- 216 枯葉さん一緒にワルツ踊ろうよ
濱崎祥子(鹿児島県)
- 217 只あるは大地と大樹夏落葉
岩村 昇(神奈川県)
- 218 ゴウさんの右足ですヨ喜怒哀楽
佐伯セツ子(香川県)
- 219 手を止めて落ち葉に見惚れ暮れ早し
田中豊恵(新潟県)
- 220 落ちてなほ地を輝かす銀杏かな
佐野和彦(静岡県)
- 221 銀杏のこの空屋敷下見する
藤井春三(埼玉県)
- 222 樹に隠れ見張番をり銀杏盗
山田楽山(埼玉県)
- 223 外は冬落ち葉掃くのは明日にしよう
小山恵美子(大阪府)
- 224 懐郷の齢を重ね落葉踏む
近藤薫也(千葉県)
- 225 銀杏散る六十年前の母校かも
星 一子(神奈川県)
- 226 ロジェ・デュブラのアパルトマンとや紅葉敷き
有田裕子(北海道)
- 227 音もなく大地に還る落葉かな
佐藤儀雄(北海道)
- 228 公園の手品師の唄きこえくる
石尾曠師朗(東京都)
- 229 銀杏黄葉やつと帰れる黄泉の国
早乙女文子(埼玉県)
- 230 洒落眼鏡かけ立話落葉舞う
居原田連星(大阪府)
- 231 古稀過ぎて落葉散りしく夕べかな
関原幸子(東京都)
- 232 江戸しのお榎立ちたる一里塚
青木日出男(群馬県)
- 233 暫くは掃くをためらふ紅葉かな
山崎吉晴(群馬県)
- 234 愛でられしあとは煙の運命かな
坪田勝秀(鹿児島県)
- 235 はらはらとさびしきつれてくる落葉
渡部美代子(山形県)
- 236 待つているここで展開するドラマ
目黒豊光(福島県)
- 237 夏落葉ホテルの窓の埋まりけり
神 一男(静岡県)
- 238 ぬぎすてて音なき初冬の休館日
大場草月(長野県)
- 239 灯籠や中村絃子さん逝きて
井田由利子(宮城県)
- 240 黄落す逢いたき人に逢いに行く
池田 岬(千葉県)
- 241 ぎんなんの届きし友は今は無し
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 242 枯葉敷き冬にそなえし木の根っ子
高橋登志子(新潟県)
- 243 水難禍屋敷を埋める泥の山
小泉和明(茨城県)
- 244 運命を素直に生きる落葉たち
小林恵子(大阪府)
- 245 思い出はつもりもつて窓開かず
合田浩子(茨城県)
- 246 夕立の後の静けさ木の息吹
鷲谷浅子(茨城県)
- 247 木の葉のダンスで敷き詰められた庭
和崎治人(山口県)
- 248 初嵐芽生えた恋もどこへやら
小川 陽(大阪府)
- 249 むくむくと下からもぐらでできそう
富樫和子(山形県)
- 250 口描けば指名手配の顔写真
松前邦広(千葉県)
- 251 ちちる鳴くこの世凝視の窓二つ
鈴木岑夫(千葉県)

●俳句・川柳募集!!



(写真提供：中川 肇さん)

- 252 あたたかや大樹に集ふ弟子あまた
小山羊子(新潟県)
- 253 肌に触れ匂いを嗅ぎて空を診る
菅井文男(新潟県)
- 254 立たされてバケツ持った日蘇る
杉浦俊雄(静岡県)
- 255 ご馳走は何リスたちの宴あと
川瀬幸子(千葉県)
- 256 秋深し思いは尽きぬ訓練所
齊藤安弘(神奈川県)
- 257 次世代へバトンタッチする落葉
山中たい子(大阪府)

右の写真から、自由にイメージし17文字(俳句か川柳)で表現してください。1枚の写真から想起される世界は無限大です。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。ユニークなイック(二句)をお待ちしております!



8月号の 心に残った作品

※より多くの作品を掲載したいと考え、大賞と、自句自解コーナーは年一回とさせていただきます。

◎俳句部門大賞 32 校門のどつと明るき更衣

宮宅芳子(岡山県)

・夏の制服へと更衣した女子校の下校時の雰囲気がよく表されている。特に「中七」が秀逸 萬濃その子(神奈川県)・季節の明るさと白い制服に「どつと」の措辞が言い得ている 大阿久雅子(埼玉県)・目に見えるようです 佐野和彦(静岡県)・6月1日の朝の校門。女の子たちの笑い声もきこえてきそう 一瀬正子(埼玉県)・更衣の日の登校時刻、更衣の生徒たちの輝きであふれている校門付近の活発な表現 邑橋節夫(兵庫県)・身体が軽くなった分、声が大きくなった校門の様子が判ります 有田俊一(埼玉県) など

25 ひらくまでよろけてのぼる花火かな

二瓶邦枝(埼玉県)

・中七で花火ののぼる様がよくわかります。よろけていても大花火になります 黒岩正子(埼玉県)・云うこと無し。読めば目に浮かびます。テレビの写真が語ってくれるかたずをのむ一瞬です 佐伯セツ子(香川県)・何回か読み直しているがこの句が気にかかる、良く観察されているほどと感心する 浦橋克行(兵

庫県)・花火の情景を的確に表現し花火に対する別の心情が誘発される 田野井一夫(栃木県) など

82 夏草の如く昭和を生き卒寿

田中美智子(埼玉県)

・夏草のように強くたくましく生きて九十才になられた！私はともも駄目だけれど、そうありたいと思いました 井原穂子(東京都)・作者は戦中派。太平洋戦争終結まで戦争に明け暮れた。敗戦により漸く訪れた平和、永生きして良かった 大橋恒次(新潟県)・色々苦勞があつたと思います。芯の力強さを感じます 湯浅芳郎(岡山県)・夏草のようにたくましく生きぬいて卒寿をむかえた感無量です 金子範子(高知県)・作者の来し方がしみじみと胸に迫ります 若月理依子(新潟県) など

◎短歌部門大賞

139 原発の廃墟と化した映像に汚染タンクの不気味に並ぶ

山田良男(埼玉県)

・2020東京五輪誘致に際し、総理は、汚染水の完全ブロックを約束したが、ブロックのための凍土壁も完全でなく、いまだに毎日汚染水は漏れ出ている 黒澤正行(福島県)・五年の寿命と言われている汚染水タンクが立並ぶ福島原発。汚染水処理の先行きはまだまだ見えてこない 桑原謙一(群馬県)・何となく私たちの身の廻りに迫ってくるおそろしい原発を恥と云えないこの国の指導者の怖さを思います。平和であってほしいと希う心を押しつけるおそろしさ 中田妙子(東京都) など

135 ものの名があれそれほれと出てこない脳細胞の老化なるべし

野木宗信(奈良県)

・同じです。脳回線も不具合なのでしょうか 中林恵子(大阪府)

147 前を行く人に合わせた足運びいつしかはなれ年の差を知る

渡部美代子(山形県)

・若者に負けじと追い越して、その夜足が攣りました 小川暘(大阪府)・現在の自分のことを読まれている感じ。痛切にその通り 鈴木蝶次(宮城県)

◎川柳部門大賞

184 旨いよしわくちやの手で清けた梅

奥那於子(大阪府)

・ユーモアがあつておもしろい。本当に旨いか確かめたいね 小山恵美子(大阪府)・梅のしわと手のしわのとりあわせが何ともおかしい 目黒豊光(福島県)・確かにそう思います、婆ちゃんの梅干しは旨い 高柳閑雲(愛知県) など

187 ハンカチに喜怒哀楽を流し込む

野田明夢(新潟県)

・そう言えばハンカチは何んでも知つている 木村洋一(新潟県)・日常に必要な「ハンカチ」持つ人の性格ですべてに使われおっしゃる通り。すべてに順応する心を持ちたい 木村舩(山形県) など

168 病院をはしごしているまだ元氣

守屋高雄(岩手県)

・病院に通うも元氣であればそれもよし 原崇雄(埼玉県)・風刺と諧謔が抜群、身に覚えのある老人が多いはず 村山徳英(埼玉県)・毎朝食後、六粒の

服薬をしています。薬のお陰で元気に過ごさせてもらっています 和崎治人(山口県)

◎フォトイック大賞



※今回は評がわれたため大賞はありませんでした。

203 潮の香に身を浸しをり雲の峰

阿部 至(埼玉県)

204 人の世に生きるは難し人魚姫 高崎登喜子(東京都)

226 プール出て手櫛でおんな整える 池田 岬(千葉県)

◎他にも
9 ほうたるの迷ひ星座へ紛れ込む 川口 襄(埼玉県)

42 七夕の願ひ書く子の思案顔 長峰正晴(千葉県)

137 北方の四島よ返せと今年もまた父祖の魂呼ぶ岬に立ちて 早坂紘司(北海道)

162 ストレスも段差も少しある我が家 木村洋一(新潟県)

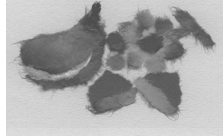
174 手をつなぐやがて一人となるふたり 小山恵美子(大阪府)

※今後ふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

Q.何がおいしい?
秋に食べたいもの

※紙幅の関係上、すべてのお答えを掲載できません。お詫び申し上げます。



★栗

- ・自分で栗拾いするのが楽しみ
細川光子(栃木県)
- ・子供の頃山で採った栗の味が、今でも忘れられません
大谷 茂(埼玉県)
- ・永平寺の門前通りの焼栗の大きさと旨みが印象に残っています
古谷 力(東京都)
- ・毎年栗の木が良く実を付け渋皮をむいて隣近所友達とに差し上げ喜ばれました
堀田寿美子(北海道)
- ・栗餅||栗を茹で栗の身をすり鉢ですぎ砂糖塩で味つけべたつかないようにつく。その栗を皮にして餅をくるみ一口大に作る
菅原茂子(宮城県)
- ・栗皮をむいて生でカリカリ
星 一子(神奈川県)
- ・ほかほかの栗ごはんは母の形見の味
高崎登喜子(東京都)
- ・栗ごはん・ふるさとの祖母の味
小澤円梨(静岡県)
- ・栗御飯。早生から晩生まで三回は食べます
田中豊恵(新潟県)
- ・栗が好きで十月の誕生日は栗おこわ
天野輝子(東京都)
- ・中津川市「川上屋」の栗きんとん
一瀬正子(埼玉県)

でも渋皮をむくのがねえ...

★柿

- ・増本和子(大阪府)など
- ・子供の頃から今も大好き
杉浦俊雄(静岡県)
- ・生の甘柿(味柿)：枝からの取立のしやつきとした歯ざわり、忘れられない味
堅田秀子(東京都)
- ・富有柿(ふるさと)はこの柿の名産地
寒川靖子(香川県)
- ・西村柿、八郷は天皇献上柿(富有柿)で有名です
合田浩子(茨城県)
- ・庭に大きな富有柿の木があり大きな実が60〜70個位なり大変甘くおいしいです
松前邦広(千葉県)
- ・庭にある木から採るのですが大きくなり過ぎ高い所の実は大変苦労します
宇都木安子(東京都)
- ・子供の頃から家に三本の柿の木があります
大好さが続いております
田野倉訓郎(東京都)
- ・会津の名産「身不知柿」上質のものはマンゴーに劣らない
目黒豊光(福島県)
- ・柿の里に生まれ秋といえば柿です
本間 進(新潟県)
- ・裏庭にあったゴマふきいっぱいの大木で年々小振りになっていったが甘かった
本庄準也(埼玉県)など



★葡萄

- ・友達の家で作っている皮の張り裂けそうなやつ
井上静夫(栃木県)
- ・ぶどう酒にして飲むのもよい
原 崇雄(埼玉県)
- ・友人の作るぶどう「安芸クイーン」「藤稜」「ゴルビー」「伊豆錦」「ピオーネ」などの品種
桑原謙一(群馬県)
- ・サントリーの工場が進出したのが私のふるさとでした
渡邊 清(宮城県)
- ・果樹園で食べたぶどうおいしかった
松田義登(福岡県)
- ・種なしが最高ですね
鈴木蝶次(宮城県)など

★桃

- ・水蜜桃
田野井一夫(栃木県)
- ・息子が旅の土産に買って来た桃をおいしくいただきました
道給一恵(埼玉県)

★梨

- ・特に豊水の水々しさはたまりません
寺内 侑(埼玉県)
- ・埼玉千葉県下は、名産地にも恵まれている
吉村充治(埼玉県)
- ・子育ての時期の運動会「二十世紀なし」が定番
濱崎祥子(鹿児島県)
- ・いろいろの品種があり、美味である。二十世紀の名称なかなか意味がありおもしろい
山田楽山(埼玉県)
- ・ジャムを作ったり、ブランデーに漬けて果実酒にします
沖 惇子(大阪府)
- ・キンキンに冷えた梨
坪田勝秀(鹿児島県)

二十世紀。母は四月に亡くなったが何が食べたいと思ったら「梨」と言った。梨のない季節告辞でした

早乙女文子(埼玉県)など

★無花果

- ・朝どりの冷えたのがおいしいです。
中田文子(大阪府)
- ・かつて庭にあった味を思い出します
本間ミネ(新潟県)
- ・実家の静岡の庭から持って来た挿木が見事に育ち、毎年三百〜四百個とれる
仁藤ひろじ(埼玉県)
- ・子供の頃家の裏に大きないちじくの木があつてたくさん実がなりました
山口嘉子(三重県)など

★あけび

- ・はじめて「あけび」がなりました
水落重武(新潟県)
- ・子供頃食べたあの甘い味が忘れられない
新井 賢(埼玉県)など

★林檎

- ・だんぜん「りんご」
大場艸月(長野県)
- ・富士リンゴ
内河邦久(東京都)など

★さつまいも

- ・ぼくぼくと栗のようで実にくまみ
石原 岳(群馬県)
- ・焼きいも!!石焼きいも屋さんの姿が全く見られなくなり淋しい限り
有島和子(東京都)

★西瓜

- ・舟形に切った真中が最高にうまい
山崎吉晴(群馬県)

A Q U E S T I O N N A I R E

・西瓜を作りました。真黒の西瓜の皮が厚くて切るのが大変

清まさじ(静岡県)

★松茸

・山灰火で焼いた松茸をタテに裂きムラサキをかけて食べる

松田重信(埼玉県)

・秋の間に一度は食べたい松茸ごはん、ほのかな香りについてお代わりしてしまおう

大阿久雅子(埼玉県)

・マツタケのお吸いもの

阿部澄江(宮城県)

・飯に豆腐汁(これ以上あるか)

津田忠彦(岡山県)

・高嶺の花の如き松茸ですね。山間部なので息子が採って来ます

鏡たか子(山形県)

・中国産なら早くから(七月から)食べていますが! 小山恵美子(大阪府)

高価すぎなので、少量だけで満足しよう

坂元正憲(東京都)

・お店に並んだ日本の松茸、もう秋。松茸御飯が味よし匂いよしのおいしさ。食欲の秋 大久保アヤ子(東京都)

松茸御飯。毎年奮発して炊きます

中山日出子(大阪府)

・松茸や母の記憶の土瓶蒸

村山徳英(埼玉県)

・松茸入りのすき焼き

岩崎令子(大阪府)

・松たけごはんに土びんむし、焼き松たけ

増田公代(東京都)など



★きのこ

・八ヶ岳山麓唐松林のキノコ狩、早朝の「カラマツジコボウ」のみそ汁。うましです

北野耕兵(千葉県)

・茹でたきのこをおろしポン酢に七味少々ですね

稲葉民雄(千葉県)

★秋刀魚

・「さんまの塩焼」平凡だけど大根おろしを乗せて!

井原穂子(東京都)

・特に銚子で食べたさんまは格別だった

長峰正晴(千葉県)

・七輪の炭火で焼く煙と匂いが堪らない

藤井春三(埼玉県)

・大根卸しをつけて情緒をいっしょに食べています

岩田 信(神奈川県)など

★鱈

・戻り鱈のたたき 津田吾燈人(高知県)

・高知で頂いた皿鉢料理をもう一度食べたい

小川洋子(大阪府)

★秋茄子

・これにかぎります

白戸麻奈(東京都)

・サイコロ状に切ってカラシ漬

木村洋一(新潟県)

★新米

・つやつやと輝く炊き立ての甘い「新米」

小林七重(新潟県)

・おかずは何もありません。かめばかむ程にきつとおいしいと思う

金子範子(高知県)

・おかずなくてももうまいです。塩おにぎりは最高

鈴木義雄(福島県)など

★たくさん食べたい!

・ぶどう、桃、秋茄子、柿寿司、秋刀魚

片山茂子(埼玉県)

・昔懐かしい栗ごはん、サンマの塩焼き、きのこ汁、忘れず日本酒少々

奥那於子(大阪府)

・焼きなす、栗おこわ、さんま、柿、ぶどう etc 食べるのが大好きな私。しっかりと太ってしまっています

大橋絵代(千葉県)

・かき(しぶがき)、モモ、遠野ジンギスカン

杉村美保子(岩手県)

・ぶどう、りんご、栗きんとん

石尾曠師朗(東京都)

・柿、さつまいも、里いも、アケビなどなど

重原 昇(新潟県)

・味覚の秋食欲の秋、梨、ぶどう、栗ごはん大歓迎

神 一男(静岡県)

・桃、巨峰と果物がおいしいです

池田 岬(千葉県)

・秋に食べる物は栗ごはん、ラーメン、まつたけごはん、果物ではデラウエテ

湯浅暉子(石川県)

・昔、野原でたべた「芋煮会」。一房の「ルビーロマン」一粒でいいからつまんでみたい!

鈴木岑夫(千葉県)

・栗ごはん、赤飯、柿

有田俊一(埼玉県)

・秋は芋名月、栗名月など作物に感謝する季節。果実が多く柿、梨、栗、ブドウあり

菅井文男(新潟県)

・まつたけ、さんま、梨と桃

齊藤安弘(神奈川県)

・栗、ぶどう、柿

林 玉子(長野県)

★その他

・すべて自家製の「ずんだ餅」

黒澤正行(福島県)

・秋から冬にかけては「鮫鱈」

関本 守(新潟県)

・辣韭漬: 甘酸っぱい味が好物で朝一つ

昼は二粒、夜三つ毎日食べています

大橋恒次(新潟県)

・母の手作りの甘納豆が入った赤飯

黒岩正子(埼玉県)

・良夜にススキと共に供える「田舎まんじゅう」十勝産のアズキ

青木日出男(群馬県)

・娘の家で作るブラックベリーのジャムがヨーグルトに良く合い美味

白松いちろう(千葉県)

・中秋の名月をみながらの萩の餅

岩村 昇(神奈川県)

・お彼岸の御萩と月見団子

近藤薫也(千葉県)

・祖母の作ってくれた粒あんの大ぶりのおはぎ。漬け物と一緒に

若月理依子(新潟県)

・茹で立ての落花生(採り立て)は大変美味であります

有坂馨園(福島県)

・冬瓜のあんかけトロトロ感がたまりません

有田裕子(北海道)

・「とうきび」煮て(ゆでで)よし、焼いてよし。コーンスープも美味しい。粒を天ぷらで食べるのは最高

久保寿雄(北海道)

・衣被ととろろ汁

福岡 悟(東京都)

・岡山茶すし

湯浅芳郎(岡山県)

・江州産の真瓜を井戸水に冷して食べると絶妙な味がする。メロン級の美味

居原田連星(大阪府)

・鯖寿司大好き!

吉里ひとみ(東京都)

・お盆から帰省中の次女が作ってくれたパエリア。間もなく帰るので、初秋には私がつくってワインと共に夫と食卓を囲みたい

井田由利子(宮城県)

・山菜の炊き込みご飯

木村誠一(神奈川県)

・河原でする「いも煮会」具材のすべて

浅野信廣(宮城県)

・零余子飯

小山羊子(新潟県)など

8月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！
皆様のご感想、はげまし、親身なアドバイスで情報誌「喜怒哀楽」
がつくられています。心より感謝申し上げます。

- ・「菜根譚」は中学生の頃、祖父の書斎にあり読んでよく解りませんでした。年老いて古川さんの解説を読み納得しています。
- ・白金葎記念句会。的確な講評と添削、楽しく勉強しました。俳句の座っていいですね。
- ・岡村様・浅海様の対談。人生の豊富な内容の会話が私達の目指す「生き方」を示している！
- ・投稿作品をよく読まれて感想を書かれていること、見習いたく思います。
- ・フォトイックには感心させられました。一枚の写真から人それぞれに想起されて素敵です。
- ・伯母の介護のため花火はがまん…八月号で花火をみた気分♪
- ・「新潟ぶらり」足の立つ内に一度新潟に行って見たくなりました。ふる里を思う歌碑の言葉に涙しました。
- ・何といっても會津八一の記事ですね。私の好きな歌人の一人、新潟の人、日本の人、世界の人ですね。
- ・岩田桂様のエッセイ「夕風と枝豆」とってもたのしく読ませて頂きました。感心したりほくそ笑んだり、ちなみに名前もわすれましたが毎年種を取って食べている晩生の枝豆があります。
- ・この度フォトイックの写真提供者の伊丹氏の事知りました。とても勇気づけられます。お元気でいっそうの御活躍を！
- ・狭山市の団地（3階）に暮らしていた時、朝日の出る時はベランダに出て「パクリ」と太陽を頂いていた。「リレーエッセイ」を読んで思い出しました。
- ・いつも感じる事ですが、紙面を通して他紙に見られない優しさが、手に取れば木目細やかなやさしさを感じます。
- ・なつかしいブリキの金魚、たしか実家の五右衛門風呂で遊んだ思い出が…。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください！

新潟ぶらり

★會津八一の唯一の門弟

會津八一のただひとり門弟、吉野秀雄の歌碑が、信濃川左岸のやすらぎ堤にある。

萬代の橋より夜半の水の面に

涙おとしてわが去らむとす

1956年11月、師・會津八一の葬儀を終え、萬代橋を渡りながら悲しみの涙を落として去っていく情景を歌ったものである。

吉野秀雄（1902-1967）と

八一の出会い、1926年。八一の「南京新唱」を読み、吉野が感銘を受けたことから始まった。八一に手紙を書き、「懇篤な御回答」をもらっている。二人が初めて対面したのは1933年。八一の揮毫を手伝って墨をすったところ、叱られた。吉野はこれを「叱られずめ」と記している。その後20年余にわたり、「叱られ」つづけながら、八一に師事した。

八一の指導はたいへん厳しく、去る者が多かったが、吉野だけはどのようなことがあっても「常に非はわが身にある」と思い定め、八一から離れなかった。あるときは破門絶交を宣告され、あるときは指導を仰ごうと渡した原稿でこぼれたお茶を拭かれ、またあるときはお詫びが叶うまで一年半かかった。

しかも、八一は吉野の歌に一度も添削も批評もしたことはないと言っている。

この行動からは考えづらいが、八一が吉野に期待するところは大きかった。20年、そんな期間をすごしたのち、吉野は八一からある歌をほめられ、諸新聞雑誌への掲載を命じられる。その後、吉野はめざましい活躍を遂げ、八一は感激のあまり涙を流したという。

八一が「吉野さんの歌は、全然吉野さんのものとなっている」と、自分と全く似ていないことを評価した点に、20年もの間、自分と相手をひたすら信じて耐えた師と弟子——「獨往」を實踐しそれぞれの道を全うしようとする二人の姿をみる事ができる。

吉野は八一の没後、『會津八一全集』第四巻、第五巻をまとめ、自身もさなる活躍をする。ただひとりの門弟の歌碑は、會津八一記念館がある対岸のメディアシップをずっとみつけ、ひとり建っている。
(菅真理子)



新潟市中央区川端町 6
信濃川左岸・やすらぎ堤

にいがた
文化の記憶館
便り(10)

無頼派と焼け跡闇市派

―坂口安吾と野坂昭如―

秋岡 啓子

新潟を代表する作家・坂口安吾（1906～1955年）は今年で生誕110年です。1946年に発表した評論『墮落論』で、「人間は生き、人間は墮ちる。（略）戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。（略）墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」と説きました。この逆説的な論説は、敗戦直後の日本で、従来の価値観が崩れさつて混乱していた国民に衝撃を与え、支持されました。

安吾の他に、太宰治、織田作之助、檀一雄ら、当時既成の文壇に反抗した同世代の作家たちは「無頼派」と呼ばれました。「無頼派」とはフランス語の「リベルタン」の訳で、本来、何にもとらわれない自由人という意味です。作品内容の傾向というよりは、これら作家の生きざまを形容した言葉のようです。

安吾は新潟市で代々の旧家に生まれました。地方の名家出身、父が政治家、大家族の兄弟の下から2番目、実父母と距離があったことなど、その生い立ちには太宰との共通点も多くあります。新潟中学校（現新潟高等学校）を退学し、上京。東洋大学卒業後、25歳で作家デビュー。安吾の創作の幅は広く、純文学、幻想小説、推

理小説、歴史小説、エッセー・評論、ルポルタージュなど多くの作品を残しました。

「無頼派」、「墮落論」という言葉の響きや、ヒロポン中毒だったことなどから、退廃的で自堕落なイメージを抱かれるかもしれませんが、安吾は押し付けの権威主義を批判し、人間の生き方を真つすぐ見つめた作家でした。その独特の鋭い視点は、代表作『白痴』『桜の森の満開の下』などにも表われています。

一方、無頼派より後の世代で、戦争中に少年時代を過ごし、自ら「焼け跡闇市派」と称した野坂昭如（1930～2015年）も、新潟ゆかりの作家です。鎌倉で生まれてすぐに養子に出され、神戸で育ちました。戦後、新潟県副知事だった実父に引き取られ、旧制新潟高校から新制の新潟大学に進むも退学。入学し直した早稲田大学も中退し、後に野末陳平と漫才コンビを組んだ際は「ワセダ中退・落第」を名乗りました。

1963年に『エロ事師たち』で文壇デビュー。68年、直木賞を受賞した『アメリカひじき』『火垂るの墓』は、占領軍の補給物資にあつた紅茶の茶葉をくすね、「ひじき」と勘違いして煮て食べたことなど、戦中―戦後の野坂自身の体験をもとに創作した作品です。食料不足で餓死した妹を描いた『火垂るの墓』は、スタジオジブリがアニメ映画化しました。

破天荒な言動で知られた野坂は、作家、歌手、タレント、政治家など様々な肩書を持ちますが、意外なところでは童謡「おもちゃのチャチャチャ」作詞者としても名を残しています。



さかぐちあんご
▲坂口安吾



のさかあきら
▲野坂昭如

【展覧会情報】

企画展示「無頼派と焼け跡闇市派
―坂口安吾と野坂昭如―」

- 会 期：10月7日(金)～11月27日(日)
- 休館日：月曜(祝日の場合は翌日)

「食楽句楽のすすめ」の執筆者・岩田桂さんは、岐阜県生まれ、新潟市在住の元大手企業の企画マン。畑を耕し、俳句の主宰をつとめ「食楽句楽」を実践しつつ人生のセカンドステージを満喫されています。食と俳句とのコラボレーション、当意即妙のエッセイをご賞味ください。

青蜜柑が目にしみる

岩田 桂

いきなり質問します。あなたは青蜜柑が好きですか。ほかのどの果物よりも好きですか。青蜜柑と一緒に死んでくれと言ったら、その覚悟はありますか。

この質問に対して、すらすらと答えられる人は意外と多いはず。何故なら、ボクらにとつてコトの外に青蜜柑に対しては、深く淡い思い出とドラマがあるからです。だからこんな突飛な存問が繰り返されても、うろたえたりしません。

じゃあ、青蜜柑との不思議な関係とは何ですかそれはですね、たとえば運動会と青蜜柑の関係です。あの昼休みのお弁当風景は、一個の青蜜柑の匂いすべてが集約されています。午前中の競技も終り、いよいよ昼食の時間がきます。すると子供達は、母親のいる観覧席を目指して一目散に駆け寄ります。

母探す視線たしかや運動会

その昼食時に出て来るのが青蜜柑でした。「これを何と心得るか！温州の青蜜柑なるぞ！」と初見を訴える訳です。

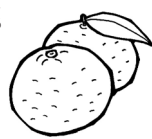
早速、青蜜柑の薄皮を下着を脱ぐようにやさしく剥き、赤い実を取り出します。そしてひと房を口に頬張れば、哀しいほどの甘酸っぱい香りが脳裏を突き刺します。しかも青蜜柑は、当時はハレの日しかお目にかかれぬ贅沢モノです。うむ。

爪たたくむく薄皮の青蜜柑

その贅沢モノを囲んでの運動会の昼餼は、ボクらの胸奥に生涯消え去ることのない深い官能を刻み込

みました。これを「青蜜柑の刷り込み」と言います。ですから運動会には、永遠に青蜜柑が登場しなければならぬのです。

実にあの時の青蜜柑は美味かった。そして子ども心にも何故か、青蜜柑は切なかった。もちろんこのような日は、秋空がどこまでも澄み切っていました。これをセンチメンタルジャーニーと言われようが、ボクたちは気にはしません。



運動会の次ぎは、遠足と青蜜柑の関係です。当時の遠足は握り飯と水筒、そして少々の果物やおやつ持参が相場です。バナナを持参する子もいれば、梨やリンゴの子もいます。丸川の一〇円ガムなどが全盛期の時代背景がありました。また、おやつを持参できない子もずいぶんいました。ボクらは彼らを馬鹿にしたりいじめたりはしません。自分のおやつを彼らに分けたりするのが、むしろ当たり前の時代でした。その中で断然輝いたのが、やはりこの青蜜柑です。

あの哀しいほどの青さと匂いが、少年と花子さんの心を揺さぶります。「おい！これ半分やるわ！」と、少年は無造作に青蜜柑を花子さんに手渡しします。そして花子さんは、恥ずかしそうにそれを受け取ります。「青蜜柑の初恋」という、切ない生涯の関係が生まれた瞬間です。

青蜜柑剥き合ふ指の震へをり

このような場合は、青蜜柑でなければ絶対いけません。まさか、バナナを半分という風景じゃありません。

それ以後すでに四十年経ちました。そして、久しぶりの同窓会で、ぼつたり少年は憧れの花子さんに出会います。その花子さんはドライフラワーのように輝いていました。「君に貰ったあの青蜜柑を今でも忘れていないよ！」と、花子は少年に告白します。

少年と添い遂げられなかった花子の哀しみが、青蜜柑にはあるのです。しかも青蜜柑が彼女の脳裏に、ずっと染み付いていたのです。

ですから二人は、青蜜柑には頭が上がりません。しかも今でも青蜜柑に出会うと、瞬時にしてあの運動会や遠足にタイムスリップするのです。青蜜柑とは、来し方のひとコマを思い出させてくれる未来の遺産なのです。

過ぎ去りしかの青みかん忘れめや

またボクらにとっては、藤村の「若菜集」の詩も青蜜柑と同じくらいの感動があります。林檎の詩です。何度も何度も繰り返し、口ずさんだものです。恥ずかしいけれど今一度、口ずさんでみますね。付き合ってください。いいですか……。

まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり
やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへし

は 薄紅の秋の実に 人こひ初めしはじめなり

わがころなきためいきの その髪の毛にかゝると
き たのしき恋の盃を 君が情に酌みしかな
林檎島の樹の下に おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと 問ひたまふこそこひ
しけれ (『若菜集』より)

おお、参ったなあ……。今も青蜜柑や藤村の詩を手にとれば取るほど心が躍るではないか。いや胸がキュッと締まるではないか。これってボクらの遠き日の青春の疼きそのものじゃないか。切なくてどうしようもないね。過ぎ去った過去は宝石のように輝くばかりです。

第7回良寛・国上寺全国俳句大会

秋分の日(9月22日)の良寛さまの国上寺(新潟県燕市)で、第7回良寛・国上寺全国俳句大会が開催されました。県内はもとより関東方面からも多くの方が参加され、雨のぱらつく吟行の後、午後1:30より句会開始。選者の「銀化」中原道夫主宰より、昨年より数多く多く広がりのある事前応募句の講評が行われました。

大賞 ほうたるになりにかへれやこれからは 権守いくを
 入選 早乙女を一人も見ずに田が了る 重原 爽美
 妝匣しょうごうの綿を海としさくら貝 浦野 幸子
 虹指して虹を分け合ふこともある 寺尾亜真李
 鬼胡桃割りたるロールシャッハかな 島貫アキ子

続いて吟行句(囁目2句)の選評が行われ、特選は今井誠一、堀川珠雪の両名に。最後に山田住職より「来年も秋分の日に良寛ゆかりの国上寺で俳句を愉しんでいただきたい」と閉会の挨拶があり、記念撮影をしてお開きとなりました。



▲吟行句の特選は今井誠一さん(左)と堀川珠雪さん(右)

山梨の歌人 山崎方代忌に60名が参列

8月20日、甲府市右左口町の菩提寺円楽寺において、第28回方代忌が開催されました。

1部では北守住職が故人を偲び読経をあげ、2部の式典では山梨県立文学館上島副館長、長谷川甲府市教育長、池谷・鮫田両市議会議員の4名より祝辞をいただきました。3部では中道地区文化協会読書部が随筆「ホーダイさんの食卓」(伊藤玄二郎著)を朗読し、方代歌の道の歌碑揮毫者で歌人・書家でもある伊藤亮氏がハーモニカで追悼演奏。記念講演は方代の母校である中道南小の元校長で方代会事務局長でもある榛原豊明氏が「画像でたどる山崎方代の生涯」と題し、画像を通して方代短歌の精神的風土としての右左口を説き、会場を魅了しました。

来年3月には第16回方代の里なかみち短歌大会も実施される予定で、没後30年を経ても方代人気はさらなる拡がりを見せています。

(文責・方代会会長 土屋善雄)



▲雨天のなか一同で墓参し方代忌を終える

送付物アラカルト☆

今号には、情報誌「喜怒哀楽」の他に下記のものを同封いたしました。

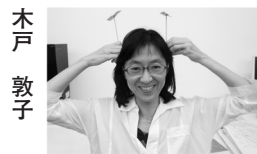
小冊子…10月10日に創立13周年を迎えました。読者の皆さまに、当社がこの仕事を始めた原点、想いを改めて知っていただけましたら幸いです。

一筆箋のご案内…新潟出身の俳句界を牽引する「銀化」主宰中原道夫氏にご協力いただき、特別な一筆箋を作りました。秋から冬への贈り物にも最適な落ち着いた色合いの素敵な一筆箋です。

ポストカードブックのご案内…前回の8月号でご案内し大きな反響をいただきました。年内特別価格となりますので、この機会をお見逃しなく!



Q. 何がおいしい?
 秋に食べたいもの
 ※ 竹とんぼで無邪気にポーズ



初物を見かけると即買するのは菊。薄紫の「かきのもと」はお浸しでも、他の野菜と和えても、みそ汁に入れてもシャキシャキした歯ごたえが抜群。新潟の秋を感じる口福な瞬間。



きのこ!きのこ!!(年中言ってる)おいしいきのこはまんが食べたいなあ。くりご飯も好き。くりおこわではなくくりごはん!



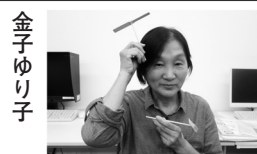
やっぱり、りんご!大好きでほぼ一年じゅう食べていますが、やっぱり秋のりんごは格別。今秋も楽しみだなあ。いつか、りんご狩りを体験してみたいです。



梨です!それも二十世紀梨!あのみずみずしく、あまずっぱい、シャリシャリした食感。少し冷やして。あー考えるだけでだれが…。



松茸の土瓶蒸し。9月に入ると気になります。お店ではだいたい特別メニューで、9月末にはもうなくなってしまふように思える。うっかりして食べられなかった年は残念無念…また来年。



山育ちなので小さな頃に食べた山ブドウやアケビが食べたくなります。とはいってもやすやすとは手に入りません。食べるのも好きなのですが、山に行き採るのが楽しいです。



栗。先日、中2の息子が帰宅して嬉しそうに出したスーパーの袋には砂だらけの栗が3個。校庭に栗の木があって、友達と拾って来たそうです。その晩、茹でて皆で美味しく食べました。



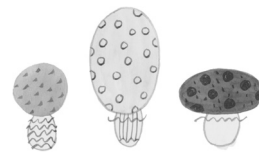
秋といえば栗!本当大好き!あと初物が出まわると母が作ってくれる無花果の甘露煮!今年も美味しく食べて秋を感じました。



無花果。いちじく。子供の頃、書道教室の庭に実っていて先生にいただいたのが初めての味。和の果物のイメージなのに、洋風のおしゃれな甘酸っぱさと品のあるぶちぶち感にうっとりです。

そこに炎の馬がいる

雪舟えま



●プロフィール

1974年 北海道札幌市生まれ。

歌集に『たんぽろぼろ』、小説に『タラチネ・ドリーム・マイン』、『幸せになりやがれ』ほか。アルバムに『ホ・スプリングサーティー』。現在は小樽市で夫と二人暮らし。

私たち夫婦の夏の散歩の楽しみに、稲妻のごとく刺さりこんできた「ポケモンGO」。話題のゲームを始めたのはリリースから一週間この七月末で、祭りのおおい小樽でも最大のイベント「潮まつり」開催中だった。私と夫はゲームをダウンロードしたてのタブレットを抱えてわくわくと坂道をくだり、マップ上にポコポコと出現するポケモンたちを、踊りながら練り歩く市民を背景にモンスターボール（ポケモンを捕獲するボール）を投げてゲットして遊んだ。

それからは、涼しく歩きやすい夜間にたびたびポケモン散歩に繰り出した。ゲームを始めると、おなじことをしている人たちに気づくようになる。深夜にスマホの画面を光らせながらフラフラと歩いて、とくになにもない場所でピタッと止まり、画面上をスイツと指を上部にスライドするような動きをして（ポケモンに向かって捕獲ボールを投げるしぐさ）またおもむろに歩きだす人。昼間は観光客でいっぱいだけど夜には人通りのなくなる道を、人の歩く速度とそう変わらぬほどゆっくりゆっくり走っている車。時どきスイツと歩道側に寄ってきたりもする。アヤシイことこのうえないのだけれど、これも、ポケモンプレイ中の車なのだ。

ポケモンGOをしない人や知らない人からすると、プレイヤーは公園の入口にずっと停まっている不審な車、なにも

毎日通勤の際に通る某神社。ここはレアなポケモンが出るということで夏休みはもちらん、台風の時も多くの人で賑わっていました。「人は異なる現実を生きていることがほとんど可視化されている」に、なるほど！と思ってしまう。

ない場所で予測不能な動きをする迷惑な歩行者に見えるのかもしれない。しかしプレイヤーはそこにモンスターやジムを見ており、そのような行動をする明確な理由がある。かつて携帯電話が始めたとき、街なかや公共の乗りものの中でとつぜん、ここにいない人としやべり始める人びとが現れた。大声で真に迫ったひとりごとをしているようでぎょっとしたもののだけ、それもいまでは当たり前前の光景。街のなかに新しいツールで新しいことをする人びとが増えてきたことで、他人とは私の知らない人とながり、私が見えていないものを見て、私が想像もつかない動機で行動するものだということが——人はそれぞれ異なる現実を生きていることが、ほとんど可視化されてきている。

ある夜、3時間ものポケモン散歩に、高揚しつつもいくぶん疲れて帰りの坂を登っていた。マップ上にポケモンが現れて、画面をタップすると、苔むす古びた石段を登りきったところに炎のたてがみを持つ仔馬がゆらゆらと立っていた。「ポニータ」というポケモンで、私は、「やつと会えたね！」と、幼い顔立ちながらも神々しい彼（なんとなく雄の気が……）を見あげた。で、そんな神馬のような存在に向かってすることといえば、捕獲ボールを投げつけるということなただけ。たまにとでも無粋なことをしてる気もする。

2016. 10-11. vol.88 (2016年10月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

☎ 0120-819-395

喜怒哀楽書房



株式会社ミュージズ・コーポレーション

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージズ・コーポレーション

編集後記

日頃、お客さまとお会いする機会が少なからずある。若輩者がおこがましいが、その度を感じるのは、どなたもそれでいい、それしかなかったという思いだ。人、一人生まれ落ちてスクスクと無傷で育つことはない。好むと好まざるとにかかわらず、兄弟が多かったり、厳しい自然条件の中で育まれたり、裕福であったり、その反対であったり。さらにその後に出会う人の影響もあるから、一人として同じではない様々な要素が、その人たらしめている。誰もがその中の最善と思っ生きてる。いいとか、悪いとか、決して言えることではない。誰もがすばらしい、そんな想いを根底にいつも抱いていた。 (木戸敦子)